

令和元年度 第1回小松市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和元年7月29日(月)
開会 9時00分 閉会 10時15分

2 会 場 小松市役所3階3B応接室

3 出席者 小松市長 和田 慎司(議長)

小松市教育委員会

教 育 長 石黒 和彦
委 員 北村 嘉章
委 員 吉原 慎吾
委 員 中惣 恭子
委 員 勝木 克子

(事務局関係)

総合政策部長	吉田 和広
総合政策部 国際&経営政策課主幹	中川 鮎美
総合政策部 国際&経営政策課主査	松本 一穂
教育委員会事務局 教育次長	吉田 均
教育委員会事務局 シニアマネージャー	道端 祐一郎
教育委員会事務局 未来の教育課長	中谷 光恵
教育委員会事務局 教育庶務課長	東谷 勝美
教育委員会事務局 学校教育課長	廣田 恵子
教育委員会事務局 青少年育成課長	松野 真弓

4 討議事項 ・SDGsを取り入れた教育課程の展開

5 会議の経過及び発言

○開 会

○和田市長あいさつ

- ・総合教育会議においては、年間でどのような議論をすべきかテーマを決め、進めていかなければならない。変わりゆく教育の在り方、方向性を議論し、教育委員の皆様がしっかりと納得された上で、現場でスピードを上げて実行していくことが重要。年間の計画を立て、定期的に検証していくことが大切。
- ・本日のテーマであるSDGsのように、新しく取り組むべきテーマが随時出てくる中で、これらについて織り込んでいくことも大切。
- ・SDGsの考え方は大切なものであり、大学、高校でも取り入れられていくとのこと。

家庭教育，地域教育においても重要であると考えている。芦城小学校の“服のチカラプロジェクト”など，すでに学校で取り組んでいることとSDG sの考え方がすでに結びついているものもある。小学校においては，こうしたところでSDG sの心を感じ取ってもらえればと考える。

○討議事項

- ・SDG sを取り入れた教育課程の展開

〈事務局〉

【SDG sについて】

- ・持続可能な開発目標（SDG s）は，2015年の国連サミットで採択された持続可能な開発のための2030アジェンダに記載されたもの。2016年から2030年までの国際目標になっている。貧困や福祉，教育，環境問題など世界の課題を解決するために17の目標と169のターゲットから構成されており，世界中の一人一人に関わる取り組みといえる。
- ・SDG sの目標はそれぞれが独立したものではなく，相互に関連している。17の目標の中でも「質の高い教育をみんなに」というゴール4は，学校教育とかかわりが深い。また，教育はすべてのSDG sの基礎であり，すべてのSDG sが教育に付帯しているとも言われている。日頃の学校での取り組みをSDG s達成につなげていくことが大切と言える。

【小松市とSDG sについて】

- ・小松市のまちづくりは全国的にも評価されており，SDG s未来都市の一つに選定された。
- ・SDG sは小松のまちづくりの指標となっており，4つ掲げられている。その中でも原動力となるのが『共創』と『ひとづくり』。17の目標のうちゴール4に関わる『未来を創るひとづくり』，ゴール17に関わる「共創のまちづくり」である。ゴール17は「パートナーシップで目標を達成しよう。大人も子供も地域みんなが目標を達成していこう」というものである。
- ・誰もが幸せで笑顔いっぱいになるためには，身近な地域の課題をSDG sの視点でとらえなおし，地域の文脈に沿って取り組むことが求められている。
- ・未来社会をつくる子供たちには，一人一人の自己実現を図ることを大切にしながらも，自然や社会，世界と共に生き，持続可能な社会を共につくるという共生・共創の力を育むことが求められている。
- ・SDG sの達成に向けていろいろな人と共に考え，協力・貢献できる人材を育成していくことが大切だと思う。

【学校における啓発について（パンフレットの配布）】

- ・市内の小中学校にSDG sにかかる資料を配布している。
- ・SDG sはゴールであり，これらゴールを達成するためにはアクションが必要。アクションを起こすためには自分事として目標を捉えていくことが大切だと思うそのため

に学校教育が果たす役割は大きい。子供を変えることが保護者の変化につながり、家庭の変化が地域の変化につながると考える。

【SDGsとESDについて】

- SDGsが「持続可能な開発目標」であるのに対し、ESDは「持続可能な開発のための教育」であり、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育である。
- ESDにもSDGsにも気候変動にかかる目標がある。SDGsは気候変動を軽減するための対策を講じることを目指すが、ESDは気候変動を軽減するために個々ができることを考え実践できるような社会の担い手を育むことを目指している。
- ESDは、2002年ヨハネスブルグサミットにおいて日本が提唱、2005年から2014年までを国連ESDの10年間とすることが国連総会で決議された。その後2015年からは、さらにESDに関するグローバルアクションプログラムが開始され、ユネスコを中心に世界で取り組みが行われている。
- 文部科学省ではESDを広めるための取り組みとして、2016年にESD推進の手引きを作成している。2016年の中教審の答申で、持続可能な開発のための教育は次期学習指導要領改訂の基盤となる理念だということが期待されている。
- 2017年に公示された小学校・中学校の学習指導要領の前文や総則の中に、持続可能な社会の作り手の育成が掲げられた。各教科に関する内容も盛り込まれており、今後は新しい教育課程に基づき、教育課程全体で持続可能な社会の構築に向けた教育が行われることが期待されている。

【これまでの学校での取り組み】

- 市内の各学校では、国際理解、リサイクル、エコ活動をはじめとする様々な活動に各教科で取り組んできている。例えば木場潟の環境について各教科や総合的な学習の時間に仕上げたり観察したり、地域の方から話を聞いたりして、環境保全の視点から自分たちにできることを考えている。
- グローバルゼミナールでは、留学生から他国のことを聞いたり自分たちの地域のことを発表したりする活動が行われている。国際理解は、まずは身近な地域や小松のことを知って愛着を持つところから始まる。
- 「買い物名人」は、平成29年に小学校家庭科の全国大会が石川県で開催され、芦城小学校が会場校となり全国に発信した取り組み。家庭科の授業で上手な買い物の仕方について学んだあとに、そのポイントを5年生の子供たちが、買い物マスターカードとしてまとめ、各家庭に配り、エコバックに付けてもらった。より広く地域に啓発するために子供たちで考え、町内の回覧板での提案も行った。
- エコクッキングの取り組みでは、6年生が家庭科の学習をもとに、エコ料理を考え、チラシを作成した。地域の夏祭りでの発表や、市と連携して作成した新聞の市役所や公共施設での展示により、広く市民に伝えることができた取り組みであった。
- 子供なりに自分のこととして考え、アクションを起こすことが大切。一軒の家だけではなく、地域に、市内に広がっていくことが大切である。

- ・課題はSDGsの目標ごとに個別に存在するのではなく、様々な課題が複雑に絡み合っていることを、地域の具体的な課題に照らして認識することも大切。それらの課題をただ理解するだけの学習にとどまらず、その解決に向けて探求し、地域からの行動を促し、ひいては世界の課題解決に向けた視野と意識を育んでいくということが重要である。
- ・子供たちが実際に地域で行動したり、関わったりする場を設定し、学んだことの意味、価値への気づき、自分の成長を実感できるようにしていくこと、実践力を発揮できる場を設定することが大事。そのためには地域につながり、地域で行動できる場、友達や家族、地域、社会へ向けて発信する機会の設定も大切である。

【今後の学校における取組について】

- ・これまで行ってきた活動、学習内容について、SDGsを意識して見る事が大切。SDGsのすべての課題は小学校の6年間で網羅できるようになっている。
- ・各学校の特色を活かし、これまでの取り組みについて、SDGsを意識して再構成するという考え方を基本に、各学校で指導計画を見直すことが考えられる。
- ・次年度より小学校においてSDGsにかかる教育が全面実施となる。次年度の指導計画を考えると、SDGsの視点を取り入れて意識してみることが大事。また、各教科の学びをつなげるよう、カリキュラムマネジメントすることが大事。各教科で学んだことが一人の子供の中でバラバラにあるのではなく、つながっていくことが重要だと考える。
- ・今、まちづくりとつなげて、教育の現場で改めて何をすべきか考える良い機会ではないか。学校の45分、50分の授業時間は、社会にそして未来につながっていく。このことを改めて意識した授業が、子供たちのために展開されることを期待したい。

〈議長〉

事務局より補足はあるか。

〈事務局〉

- ・学校ではいろいろなことを行っているが、2030年に目標ができたことは、先生方もまだ理解するところまでいっていないというのが現状。まず先生方の理解というところからSDGsを紹介するポスターを配布し、その後教育課程にどのように位置づいていくかというところを、市教委としていろいろな事例を持ちながら先生方に意識してもらうことが一番大事だと考えている。
- ・今までやっていることをさらに高めるためにも、再構築というのが一番大きなキーワードではないかと先生方の目標としては思っている。子供にとっては、市で作成した啓発ポスターの「小さなアクションは世界を変える大きな力になる」という、この言葉が一番大きな目標になると考えている。

〈石黒教育長〉

- ・温室効果ガスについて、現在一人当たり年間11トン排出されているという。地球温暖

化をくい止めるためには、年間2トンにしなければならないとのこと。そのためにもどういうことをすべきか我々は真剣に考えないといけない。未来に生きる子供たちにもこうしたことについて勉強させていくことがとても大事。SDGsの目標からいったい何をすべきか、バックキャストのアプローチをとっていくことがとても重要であり、そういう意味で意識を喚起し、地球規模での課題の背景に何があるのかということも当然勉強していかなければならない。

- 地域とのつながり、地域の良さ、地域の課題を、学校教育の中で学び触れながら、携わっていく人材を育てていくことが必要。
- 本会議に先立ち読んだ本には、世界中の働く人たちは疲弊しているということも書かれていた。グローバル化が進むと競争が激しくなり、安い労働力で安い品物を生産することが優先されるようになってきた。そうした中で、パワハラであるとか、時間外勤務といったことが横行している。こういうこともSDGsの大きな課題の一つだということだった。
- いろいろなところで課題がつながっている。一つの側面で見るとはならず多面的な目を持って捉えていく必要があるということをお子たちに気づかせていきたい。

〈吉原委員〉

- SDGsについて、言葉だけが独り歩きしていかないようにしなければならない。何をもって目標達成とするのか、ということは小松市としても具体的な達成イメージなどを作っておかなければならないと思う。

〈議長〉

- 先日正式にSDGs未来都市に選定された際に、市の取り組みは方向性が間違っていないことを評価委員の皆様よりお墨付きをいただいている。
- 各自治体によって立場や環境、経済力が違い、一律ではないが、それぞれの市が特徴を持った取り組みを進めてほしいということを委員の方が言われていた。小松市に期待されていることは大きく二つあり、一つは中小企業にSDGsを深く浸透させてほしいということ。もう一つは、“学び”を徹底していくこと。これについては、市民の様々な学びの機会や、高校生から小学生までの科学をはじめ、様々な学びを広げている。
- 市がこれまでやってきたことについてSDGs未来都市評価委員会においては合格点をいただいたということであり、これをさらにどのように浸透させていくかということが、今後半年の勝負であると考えている。

〈吉原委員〉

- それはあくまでもものの見方や考え方という目標か。

〈議長〉

- 目標であり、実践である。一人一人の小さなアクションが世界を変える大きな力になると考える

〈吉原委員〉

- 学力向上とのバランスも大切である。限られた時間であるので、一つに偏ってばかりというわけにはいかない。

〈議長〉

- そのことでよく触れられるのは、パキスタン出身のマララ氏が述べられた「One teacher, one pen and one book can change the world」という言葉である。現在も学校にいけない子供たちが3億人以上いる、特に女性が学ぶ機会がないと言われていいる。これは地球上全体の問題である。
- 日本においては学ぶ機会があるが、異なる意味での教育に対する地域課題があると思われる。学力というのも一つの重要な要素であるかもしれない。能力的にも教育環境的にも差を狭めていき、どうメディアム化していくかということなのかもしれない。この点については、もっと議論が必要。

〈中惣委員〉

- 小原流東京本部より講師を招いた講習会で、ペットボトルと厚紙を使い、手作りの花器を作るという時間があつた。大人対象の講習会であり、講師の話の中で、日本全国、様々な分野においてSDGsに基づいた“環境にやさしく”という考え方が浸透しているのだと感じた。
- SDGsという言葉は先日初めて聞いたが、日本全国で広まっていることを感じた。学校現場では、先生方も子供たちも、言葉が先行しない自然な感じで教科に取り入れていただき、今までも大切にされてきた思いもある中で、無理のない形で取り込んでいけるように進めていってほしい

〈勝木委員〉

- SDGsについて、テレビのCMでもよく見るようになったが、いずれもぼんやりとした取り扱われ方で、具体的にどういうことをすることなのかよくわからないと感じていた。
- 本日の説明にもあつた芦城小学校の買い物名人の取り組みや、自身の子供の学校においては、総合の時間に、梯川についてどのようなごみが落ちているかといった汚れについて学んだり、アルミ缶やエコキャップを集めるなどして、海外の子どもたちへの予防接種をするためのお金を集めたりと活動している。
- 新たなことに取り組むというよりは、これまで子供たちが学校の中で取り組んできたことがSDGsにつながるということを伝えられれば、子供たちにとってわかりやすく、先生方にとってもの指導が進めやすいように感じた

〈北村委員〉

- SDGsについて、かねてより青年会議所で進めている内容だが、とても良い考え方。「もったいない」や「おかげ様」、「かたじけない」等、日本人の考え方に合ったもの

である。

- ・日本人はもとより環境を大変大切にしてきた民族である。こうした考え方が目標値となっており、これから実践していくことが大切である。
- ・市の子供たちが取り組んでいることを世界に発信していくことも、大きなメリットがあると考ええる。
- ・社会、家庭、総合学習、理科、様々なことを子供たちが取り組んでいるが、それぞれの教科の関連と連携が大切であり、小学校だけでなく幼保も含め系統的にしっかりと進めなければならない。企業はこうした点を支援していかなければならないし、地域運営でやっていかなければならない。学校のPTAなど様々な団体と一体となって確実にやっていくことが大切。
- ・数年前よりエコバックやごみの有料化、分別などに大変効果があるとされ、この分野でも様々な実践がある。こうした実践を進めていくということが大切。
- ・今後どのようなことをどう進めていくかの計画も大切である。

〈議長〉

- ・事務局ではどのように進めていくべきだと考えるか

〈事務局〉

- ・まずは教師に理解をしてもらうことから始める。また、すでに進めていることが当てはまるということ、各学校の特色ある取り組みが目標に向けた取り組みであることを感じてもらうことが必要であると考ええる。

〈北村委員〉

- ・これまでやってきたことも、目標をもって継続し、新たな視点で見つめなおしながら再構築していく。木場潟の周辺の小学校で取り込まれる浄化の取り組みなども一例であり、これをもっと進めていくこと。そこへ市立高校生などが参画するなど、広がりを持ち、輪を広げ、ひいては大学や地域へ広がっていくことである。また、それらを、目に見えるように、様々なマスメディアを通じて発信していくことも必要。

〈事務局〉

- ・広報こまつ8月号では市のSDGs達成に向けた取り組みを特集。
- ・SDGs先進度のランキングで日本はアジアで15位、小松市は全国で45位、そのうち社会分野では9位である。
- ・市では2016年3月にふるさとこまつを未来につなぐ条例～PASS THE BATON～を制定し、NEXT10年を定めるなど、予防先進、やさしいまちづくり、環境共生等の旗印の下で、人々の幸せやこちよいくらしを追求しているところであり、その一つ一つがSDGsの理念に結びついている。このことから7月1日、国におけるSDGs未来都市に選定されたもの。
- ・また、今年6月28日にはコマニー株式会社とSDGs推進にかかるパートナー協定を締結、減災・防災をはじめ、ひとづくりの面で今後企業と小松と世界のよりよい未

来をめざして取り組みを進めていくこととしている。

〈議長〉

- ・商工会議所でも同様の取り組みを進めているところかと思う。企業の責任は環境問題、社会貢献が2つの柱となっている。そして、企業自身のガバナンスをしっかりと行うということも併せて、E S Gなどと言われていたところ、これがS D G sに変わっていかうとしている。
- ・先進国として、日本は様々なことに取り組んでいる。このベクトルを、特に先進国の間で合わせていき、最後に向かう方向が一緒になる必要がある。地球みんなの幸せや、地球規模でものを考えるということに繋がっていく。
- ・特に教育においても、「地球規模」ということを取り入れて行こうというものであり、地球にはいろいろな人がいるということを常にイメージを持ってもらうだけでもまずは良いと思われる。

〈北村委員〉

- ・小松市はものづくりのまちであり、中小企業が多い。学びや教育については、教育委員会ですっきりと進めていかなければならない。小松大学や工業高校がある中でこれらと関連して進めていくことが大切。そこで育った人たちが重要になっていく。
- ・環境等、様々なことについて、徹底的に地球規模で考えながら取り組んでいくということが大切。高校や中学の時から地球規模でものを考えているかどうかで就職した際に全く違う。
- ・小松マテーレでは過去に環境へのマイナスの影響を発生させたこともあるが、現在は環境に対する取り組みに大変熱心で、汚染の浄化だけでなく緑化などに積極的に取り組んでいる。企業にも考え、取り組んでいただくことで、関連会社をはじめその他の中小企業へ取り組みが広がっていくことを期待している。

〈勝木委員〉

- ・S D G sについて子供たちに伝えることで、市のジュニアリーダーなどを中心に考えたり、大人が思いつかない柔軟な発想が子供たちから出てきたりすることも期待できる。
- ・早寝早起き朝ごはん運動や省エネ活動のように、学校から子供が持ち帰るプリントやアンケートへの回答依頼等を通じて保護者が学ぶことも少なくない。学校で子供たちが先生から教えていただき、子供から家庭へ伝え、地域へ展開する形は理想的。
- ・栗津小学校の食育活動などは、運動会でクイズ形式で実施したと聞いている。親子で一緒に考えられる素晴らしい取り組み。

〈議長〉

- ・市立高校1，2年生各200名を対象に、市の置かれている状況や未来、そしてS D G sについても話をした。今後生徒たちはグループに分かれ、これから自分たちが取り組まなければならない課題を見つけ、グループで活動し、市に対する提言や地域や自

分に対する提言について発表する予定。自主性を持たせて進めることとして、市立高校から取り組んでいる。

〈中惣委員〉

- ・若い力が重要。大人へのSDGsの浸透は、子供が学校で学び、大人をひっぱっていくパワーを期待したい。子供が親へ説明する形で学校の先生から指導があれば親子の会話も増えてよい。

〈吉原委員〉

- ・市としてどこを目指すのか。SDGs先進度総合ランキング45位とあるが、図る物差しがあるのか。

〈議長〉

- ・SDGs先進度は、日経新聞が調査をしているもので、アンケート調査に基づくもの。例えば「住みよさランキング」は東洋経済社が様々な公式データを集めて調べるもの。SDGs先進度ランキングはアンケート調査とすでにある公式データによって調べられている。今後より厳しい調査になってくるとも予想されるが、現在の調査においては悪い評価ではなかったということである。

〈吉原委員〉

- ・SDGs先進度のランキングにおいて順位を上げていくというところに目標を置くのか。または市で実施する幸福度調査の評価項目の中にSDGsについても含め、軸足を置いていくのか。いずれかによって取り組みも変わってくると考える。
- ・SDGsの目標年は2030年で10年以上も先。目標年に向けて持続できるような推進力としてエンジンがないと、継続していくことも大変ではないか。

〈議長〉

- ・行政の方針にかかる質問であると捉え二つお答えする。
- ・これまでの10年間で市ではビジョンを2回作成した。今回は来年が市制80周年に当たることもあり、さらに20年先を見据えた20年ビジョンを作成する。
- ・新しく作成するビジョンの中ではSDGsについてもさらに高めていくことを目指す。また、SDGsにおける2030年の目標年はこのビジョンの中間地点でもある。市のビジョンと地球全体で求められるSDGsの政策が連結し、これをわかりやすくしたビジョンを作成したいと思う。
- ・また、幸福度やSDGs先進度ランキング、住みよさランキングの16位など様々なあるが、いずれも団体戦と言え、市全体のイメージであり実力である。幸福度は個人個人の気持ちであり、感じ方である。2年に一度金沢大学の教授と学生に小松市を訪れていただき、各地域をすべて調査していただいている。個々の幸せの質を追求するということが、行政全体の住みよさ両方が大切であるが、個人の幸せはより優先されるべき、つまり個々への教育の質が優先されるべきと個人的に考えている。双方をそ

れぞれ高め合いながら、ベクトルを合わせていくということを考えている。

〈北村委員〉

- どのような取り組みを進めるにおいても、必ずキーマンやリーダーが必要。先生が一方的に押し付けるのではなく、学校が仕掛けをつくり、生徒が自発的に動き実践していく形がよい。小学校で取り組んだことが中学校へ波及していき、地域の方、PTAの方がそれを支援するといった仕組みが良いと思う。
- 地域の特性のある取り組みの中で、一番大切な部分を進めていくことが、継続につながるのではないかと考える。

〈議長〉

- 児童会、生徒会等に、このテーマをそれぞれ選んで頂き活動するというのはどうか。

〈石黒教育長〉

- 生徒会や部活動等ですでに環境等のテーマに取り組んでいる中で、SDGsの意識付け、動機付けをすることは大切。
- いろいろな課題が生まれ、いろいろな言葉が生まれる中で、言葉の整理も大事。主体性も大事であるが、前提として多様性を知ること大事。多様性の中で共同しSDGsに取り組む力が生まれ、自分でやってみようという主体性も出てくると考える。
- 活動に参加して気付く、というのはそのための流れの一つ。こうした取り組みはこれまでも行ってきたが、これからもSDGsの切り口で進めていけると考える。

〈議長〉

- これからは国際人を育てていかなければならない。これからの若者、子供たちは世界で活躍することが当たり前である。
- SDGsの啓発として第1弾として子供版のパンフレットを作成し配布した。今後保護者等様々な層を対象に啓発していかなければならない。
- 今後学習指導要領にもSDGsが含まれ進めていく一方で、学校の統合などにも取り組んでいかなければならない。しっかりとリードをお願いしたい。

○閉 会